

文研院生二
文

No. 3

東京教育大学
大学院文研
院生連絡會議

のため現代科学の発達段階に見合つた研究教育や
センターとして新設構想はうち出された。こゝで一
方で貿易開発、他方では日本の要請に合つた
テクノクラートリ技術と管理機構の組織、自己の
存在に無自觉なる知的大衆を作つとすることにな
るのである。

つけ身体化していく方向であり、したがってもうレ^ト中では「現在相對的にのみ自由であるにす^ト」ないし、學問の自由が一卮形體化されていく、結局は研究の自由を祀るものである。(3)このようは指向性を完遂する筋波紋軸に我々は反対である。

筑波問題をめぐる状況の認識を深め、
さらに抗議行動の持続的大拡大を！

言議資料

3. 大學当局、增進派のある人々は以上述べた
ような見解に對して、そうであつてなぜ革
いのかといふ。またある人々は、かの見解の空
論性を主張し、自己の實在性を主張する。果し

はうない。」

1. 学部ストが始まって すでに 1ヶ月目に入った
いるが、大學当局の沈黙戰術のために斗争は現
象的には確実した状態にある。この点、学部スト
に觸発されつつ、文研生の授業放棄がなされて
きた。しかし、一定の可能性をはらみつつも、い
まだ文研全体の斗争とはなっていない。こうして
中で七月から斗争に入ったいくつかの院生会
に対しても、リミットを軸とした攻勢がかけ
られてきている。もし現状のまゝで本格的なタイ
ム・リミット攻勢がかけられたならば、文研の場
合授業放棄斗争にへつた時期が名草によって異
なるため、結局名草戦略がはざれ、放棄中の専攻が
らくず文研院生全体の運動が昏死となる危険性
がある。したがつて、現在文研の斗争はタイム・
リミットをいかにはねかえすかにその全命運がか
けられていること多いえる。こうした事態の中で
進むべき道は授業放棄斗争を部分から全体へと拡
め、放棄中の専攻院生会を孤立させぬようにする
こと、また、放棄中の院生会で院生の意を一層
まとめるため、以下二点を是を論じたい。
2. 現在斗争は抗議移動を軸とし、当局の確謹社
進逼撃での強行策、沉默策もあいまって全學
的ストライキはつていて、したがつてこの斗争に
かかわるところ、第一に抗議移動自体を論じたい。
得ない。

の研究体制を早急に完成する必要がある」とのべ、研究學園都市構想を「うちにしてきて」いる。明らかに、それは技術革新を基礎としつつ、貿易自由化・国際市場競争に対処する政策として考証らざりでいるのだ。この貿易自由化・国際市場競争へ理屈化を基本的動因として激烈な様相を呈している。資本同志の生死をかけた競争がなされていて、かかる事態のなかで個別・各國の模倣は、この市場競争につき勝つために国内体制の改編整備強化に全力をそそいでいる。日本では安保改訂・合理化・国防強化と、国を守る気概の強調、教育体制の改編である。特に教育制度に関しては大学教育改革論に当面の雰囲気があやされている。その政策の第一は大学の目的別再編で、具体的には研究開発の大学院大學、社会企業の相いべき養成する四年制大学、短大・高専、といった階級的分離化、そしてそれに呼応しつつ、現代社会に合った幅広の学部・学科の改編がなされていく。例えば、経営学科、人間工学科など。第二には、こうした方向を遂行するためにも障害になつていいものの排除である。その一は、政府・大蔵省の急速しての中微罪路線、大学自身による自主規制による監視能力の限界説を物質的根柢にした大学当局の權

も具体化されていない状態で、全般的な各社による報道は薄っばままである。しかし、このことは我々の見解の実論性を意味しない。事實上スター・アランがオーナーの平岡報告会でも、一般教養の輕視、専門教育の強化、工、林、造形学部、理哲学科の設立、総務室、農業の要請にみ合った学部学科の設立、そして大学院大學化、全寮制二十四時制の実現への志向がうち出されている。吾と夫は、資本主義的構造に合つた大学教育策が實行しているということである。とりわけ大切なことは、未来は「現在」の結果であり、移動という結果は、それまでの経験の総合であるということだ。つまり、現実に立つて現状を見ると、現状は文部省政策が意図する方向で結果への道を掃き清めているのだといえる。そこには我々は最大の危険を見る。別説すれば、逆行緩慢過程、沈黙寡聞の専門教育、本館封鎖や軍事など当局権限の集中強化移転機関説、等等である。まさしく、教育大の民主的历史を逆行させるものであり、大学自治の弱体化解消策が進行している。教育大では、既得物権で、立候補の文教政策は完遂するであろう。

さて、我々は以上の事実をいかにどうえがえこわばならないか。まさしく、このことは全院生が、自らと自らの専門に向うべきことである。事態は全院生に自己の判断を迫っているのだ。自己の実

学生側も四学部にストは擴大したもの、理屈を流動化し押し切る力をもっていない。したがつて局面は確実に抗議におちいつていふ。しかし深層部ではかなりの動搖がみられ、当局は、調査会一年凍結MPD委解説、学長・五学部長辞任、学生の声を聞く機関の設置などをもつて、解決のイニシアチブをとろうとしているといわれる。これに対し、学生側は、こられた收拾策をねり、六一〇決定撤回までを意味、大衆団交を獲得しようととしている。しかし、学生側も、意見の相違から全体的統一を欠き、さらに局面の複雑化が一定の頭の作付をあこしていふ。こうした中で我々は、当局に抗議を続け、斗争を強め、現局面を打破しつつ、文研究生会として指揮教導を行はず方向が指向されねばならぬ。

5. 今後文研での斗争を押し進めていくには、理改を極めとし、その内部をかためつ、横へと運動を拡大していくことである。こうして方向を責任をもつて追求する機関リ自治会を整備することが今や重要である。院生の弱い現実の姿に対する反対及指向原則的にし、支服するために、第一に、ヒゲ等に対する戒心を深めること、オニに、講座制の中で、単個を知的私有財産として扱うことにはげんでいることにによる。但と公(全)の分裂、その自己矛盾的自己ありこえること、を直向せねばならないだろ。こうした方向をもう一つ、自詮会をつくらなかが

技術移転は前から実験を検討して、大學包装の研究と政府の研究開拓院、都市構想との出会いの結果としてある。したがって、技術移転は両者のからみ合いとして分析されねばならない。研究開拓院都市構想は当初音響の運営事業として実施されたのだが、その進行過程のなかで研究所技術開拓院都市センターという性格を持つにいたつた。音響開拓院問題研究会「中間報告」では「技術革新に即応して確実技術の普及創利を図り、資源的開拓化に対応して、我が國の生產技術を向上にたす」とある。

開拓化の方角である。このことは、学部教務会の
自説を根本から解体していくものである。政府・
文部省は以上のよつと上陸的政策を進めており、
その実態によつて、より有効な人づくりをねらう
としているのだ。このよつた政策の一つとして、
東洋研究所園都市構想を位置づけられなければほ
うだい。したがつて該構想は国内体制の改編強
化を前提とする科学技術政策の具体化である。た
しかに生産規約のうちあくまで「農業問題」
に歴史的意味をもつてゐるところから、かくの事態解

編集部は次の如きに見解を示す。当局に抗議する
3.(1) 秘書會議開催はうがに指道高橋にみられる
强行采次運動は秘書競争が提起している。大學
教育・自治・学問の自由等々の問題を解決するこ
向ではなく、この提起ニスをもつて押しつぶして
いく方向である。されば全く不毛な方策であり、
ここに我々は既成の危険を見るのである。さうし
た方針當局の態度に我々は抗議する。(2) 策道終
が終在以上に我が大學の自治、学生の自由をしの

内での院生の権利拡大を各院生会が、当面は各自でなしていくべきである。

院生諸君
授業放棄票を取扱しよう！

合同院生会 全体集会に召集しよう！

十一月三十日(木) G502 1.00 ~ 4.00

金額 院生会 G502 1.00

金額 合同院生会 (員、支教、倫)
士日十九日 G 406.3005